

# 水景・共同性・女性原理による 庭園自給圏都市の再構築に向けて —風土・人間・都市に関する一考察—

Towards Restructuring Garden Cities with Self-Sufficient Lifestyle  
in Water Area Composed by Cooperativity and Feminine Principle  
-A Study on Natural Features mixed  
with Spiritual Features, Human Being and City-

齋藤義則

## 要約

人間とは何かから問いを発し、都市の起源を探り、風土は都市にどんな影響を与えたかを既存の代表的な文献から整理し、日本の都市社会が明治以降の近代化過程と1960年代以降の急激な都市化過程でどのように変容したかを考察した。これをふまえて、人口が急激に減少する「縮小型」社会における都市の存立要件について検討し、将来都市像として、「水景・共同性・女性原理による庭園自給圏都市」を提案した。

## はじめに

人間とは何か、都市とは何か、都市は人間がどのような理由から創造し、つくりかえてきたのか、という命題に答えようとしてきた研究の蓄積は膨大にある。都市計画研究分野に限定しても、多岐にわたり、共通認識が形成されているわけではない。このような状況のなかで、産業革命以来の人口増加への対応と都市への人口集中の弊害を抑制するために構築された「近代的」都市計画の方法と目標が、我が国の急激な人口減少が予測されている社会においては機能不全を起こしつつある。

そこで、都市の起源と人間、風土等との関係を再考し、人類がこれまで経験したことのない未曾有の人口減少という社会基盤の変化に対応した将来都市像をどのように描けるの

か、「規制」と「計画」という都市づくりの方法が今後も有効なのか、都市づくりの主体と組織はどう変わるのかなど、多様な問題が突きつけられている。

本稿は、このような社会基盤の著しい変化が予測されているなかで、人間と都市、風土との関係という基本命題に、代表的な既往研究の成果をふまえて著者の前提をおき、人口減少社会における日本の将来の都市地域像について考察するものである。

## 1 人間の特徴と都市の起源 —松沢哲郎とルイス・マンフォード から—

霊長類研究者の松沢哲郎<sup>1</sup>は、これまでの長い比較認知科学の研究をへて人間とチンパ

1 『創造するちから チンパンジーが教えてくれた人間の心』2014年10月（初出2011年2月）岩波書店

ンジーの違いを「人間とは何か。きっと『想像する』という部分が違うのだ。『想像する』ということが人間の特徴だと思った」と結論づけている。

チンパンジーは、「今、この世界」に生きている。だからこそ、瞬間に提示された目の前の数字を記憶することがとても上手だ。しかし、人間のように、百年先のことを考えたり、百年昔のことに思いを馳せたり、地球の裏側に住んでいる人に心を寄せるというようなことはけっしてしない。

(中略)

今この世界を生きているから、チンパンジーは絶望しない。「自分はどうなってしまうんだろう」とは考えない。たぶん、明日のことさえ思い煩ってはいないようだ。それに対して人間は容易に絶望してしまう。でも、絶望するのと同じ能力、その未来を想像するという能力があるから、人間は希望を持てる。どんな過酷な状況のなかでも、希望を持てる。人間とは何か。それは想像するちから。想像するちからを駆使して、希望をもてるのが人間だと思う。

このことは、都市の起源を暗示しているように思える。その起源を画一的に定義することはできないが、いくつかの観点から指摘することができそうである。

まずは、都市の起源は人間が定住するための住居と共同利用施設などの物質生活の必要性からと考えられている。だが、『都市の文化』<sup>2</sup>の著者、ルイス・マンフォード<sup>3</sup>は、都市の起源は「物質生活に関するものではなく、宗教的なものだ」と指摘している。長文ではあるが、つぎに引用する。

人間の定住的集落の発達には、他の種

類の社会性動物が示す要求に似た動物的な要求の表現が見られるが、しかし、もっとも原始的な都市の始まりでさえ、それ以上のものを示している。

(中略)

死者に対する古代人の尊敬—それ自体、昼の幻や夜の夢の強い影像に魅せられた状態の表現である—はおそらく、一定の集まりの場を、そしてついには永続的な定住の場を求めさせるのに、実際的に必要より大きな役割を果たしたものであろう。旧石器人の不安な放浪状態のなかで、死者は洞窟や石塚を目印とした墳丘や集合的な塚山といった永住の地を得た最初の者である。それらは、おそらく、死者の霊と交わり、慰めるため、生者が時をおいて戻ってくる目印であったのだろう。食物採集や狩は、ただ一つの場所における永続的な定住を促さないが、死者は少なくともそうした特権を要求する。以前、ユダヤ人は、祖先の墓のある土地を世襲のものとして要求した。そして、十分に証拠のあるこの要求は、原始時代から存在したものと思われる。死者の都市は、生者の都市より先にできた。事実、ある意味では、死者の都市は、すべて生きている都市の先駆であり、ほとんどその核である。もっとも初期の原始人の埋葬地から、文明がつぎつぎに終わった最後の墓場ネクロポリス（死者の都市）までの歴史的空間に、都市生活があるのだ。

(中略)

一時的定住の起源は三つの面を有するが、そのうち二つまでが、物質生活に関するものではなく、宗教的なものだということである。

続いて指摘する次の考察は、人間が都市を

2 『都市の文化』1984年1月 生田勉訳 鹿嶋出版会

3 『歴史の都市 明日の都市』1972年1月（初出1969年1月）生田勉訳 新潮社

創造した理由を考える上できわめて重要である。

単なる肉体的存続よりももっと価値あり意味ある生活に関係がある一つまり、性および生殖という最初の神秘と、死および死後の世界という最後の神秘とをさとり、過去を意識し未来を思うということに関係があるのだ。都市がかたちをなすにつれてもっと多くのものが加わってくるであろうが、これらの中心的な関心は依然として都市の存在理由であり、それらは、都市の存在を成り立たせている経済的実体と分かちがたく結びついている。

ここで考察されていることは、合理的な資本主義が何故ヨーロッパで成立したのかを追求し続けたマックス・ウェーバーが『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』<sup>4</sup>で宗教と経済の関係について論証したことにも表れている。

ルイス・マンフォードはさらに続けて指摘する。

都市の最初の芽生えは、「巡礼の目的地となる儀式的集まりの場」、すなわち、そのもつ自然的有利さに加えて、「霊的」で超自然的な力、普通の生活過程より高い力や大きい永続性や広い宇宙の意味を持つ力を集めているゆえに、家族や部族の集団が季節ごとに引き戻される場所にあった。それを支える構造物は、旧石器時代の洞窟であれ、聳えたつピラミッドをもつマヤの儀式的の場であれ、より永続的な宇宙的な像をあてえられていた。

さらに都市の起源は、「子供を世話し育てるための集会的な巢」<sup>5</sup>であったとも指摘する。

松沢哲朗<sup>6</sup>は、人間とチンパンジーの子育ての違いを考察している。チンパンジーの子育ての特徴として、「一つは、約五年に一度産む」、「二つめの特徴は、長い間授乳しているということ。(中略)生まれてから四歳頃まで、ずっと母親の乳首をすっている」、「三つめの特徴は、母親が一人で子育てすること」の3つを指摘している。一方、人間の子育ての特徴については、「子どもが独り立ちする前に次々と産み、手のかかる子どもたちをみんな育てる」というものだと指摘している。

人間のほうがチンパンジーより大きい。チンパンジーの赤ちゃんは二キロ弱の体重で生まれるのに対して、人間は三キロで生まれる。だから、人間のほうが長い期間をかけて子育てし、チンパンジーが独り立ちするのに五年かかるとしたら、人間の子どもが自立するには少なくとも七～八年かかる。もしも、人間が一七、八歳から八年おきに子供を産むとしたら、一八歳、二六歳、三二歳、四二歳と産んで、五〇歳になると難しい。となると、一人の女性は一生のうちに四人しか子どもを産めないことになる。野生のチンパンジーと同じように乳幼児死亡率が三割と高ければ、出だしから二人になってしまう。そういう種は生き残れない。

そのため、人間は「多くの子供を育てるために、つがいを形成することによって伴侶をつくり、さらには寿命を延ばして生殖期後期間を延ばすことによってお祖母さんをつくり、母親以外も子育てに参加して子どもたちをみんな育てる」、「人間とは何か、その答えは、『共育』、共に育てるということだ。共育こそ

4 1988年7月 大塚久雄訳 岩波書店

5 前掲3

6 前掲1

が人間の子育てだし、共育こそが人間の親子関係<sup>7</sup>であると言う。

マンフォードは、「豊かで確実な食物が得られる」ようになったのは「おそらく1万5千年前の中石器時代」で、「精神にも生殖器官にも活発な影響」をおよぼし、「余暇」をもたらした。

「おそらく一万あるいは一万二千年前」頃に「定住、馴致、規則正しい食事の過程が第二の段階」に入り、「主導権が、狩りをする男性—敏捷で、足が早く、すぐ殺し、生業の必要から残酷な男性—のものでなくなり、受動的な女性—自分の子供に結びつけられ、子供の動作に合わせてのろく、あらゆる幼いものを守り育て、時には親に死なれた動物の子にさえ乳をやり、種子の成長と増殖によって食物が多くとれることを知る前は種子を捲いて苗を見守っていた（おそらく最初は豊作儀礼において）女性のものになるという変化があった」という。「安定した村の生活は、より小さな集団で移動するゆるい結合の形より、多産と養育と保護のために最大の便宜を与える点で有利」で、「幼児の世話を共同ですることによって、より多くの者が栄える」とし、「村も女性の創造物である。（中略）村は子供を世話し育てるための複合的な巢」であり、「村のあらゆる部分に、家やかまど、牛小屋や納屋、水槽、貯蔵穴、穀倉に、そして都市へ進んでからは城壁や濠に、また中庭から回廊までのあらゆる内部空間に、構造的にあらわれている。家や村、そして結局は町自体が、大規模な女性である」。

人間は、チンパンジーが「今、この世界」<sup>8</sup>、現在にだけ関心を持つとは異なり、過去と未来に対する「想像する」<sup>9</sup>能力をもっている。「過去を意識し未来を思」い<sup>10</sup>、過去と未来を想像する不安と恐怖を祓い、希望の持てる定住の場として都市が創造された。そのため、世界のほとんどの都市は宗教施設をもっている。

そして人間は、チンパンジーが「母親が一人で子育てする」のに対し、人間は「『共育』、共に育てる」<sup>11</sup>、ために都市を「村も女性の創造物である。（中略）村は子供を世話し育てるための複合的な巢」<sup>12</sup>、すなわち子育てを共にするための「女性原理」で創造したと言える。

## 2 風土と都市

### —和辻哲郎『風土』から—

都市の起源について既存の主要研究から確認したが、さて、世界各地の気候等の自然環境の違いは人間の生活と文化、都市環境にどのような影響を与えるのだろうか。都市の固有性、地域性の問題である。

和辻哲郎<sup>13</sup>は、「風土が果たしてそのまま自然環境と見られてよいか」という問題を提起し、風土を自然環境と人間との「関係的構造」として捉えることの重要性を指摘する。「風土の型が人間の自己了解の型」とあるところから到達したと述べ、風土をいかに類型するかという命題を提起する。

7 前掲1

8 前掲1

9 前掲1

10 前掲3

11 前掲1

12 前掲3

13 『風土』1972年5月（初出1935年9月）岩波書店

人間存在の風土的規定は、人間の歴史的風土的構造一般の問題であって、具体的な人間存在の仕方の考察ではない。それは具体的な人間存在が必ずある国土ある時代に特有な仕方においてあるということ規定するに留まって、それがいかくに特殊であるかを問わない。

和辻哲郎は風土を3つに類型している。モンスーン（湿潤）、砂漠（乾燥）、牧野（乾燥と湿潤）の3つである。

以下は、モンスーンに関する記述である。

モンスーン域の風土は暑熱と湿気との結合をその特性とする。

（中略）

湿気は最も堪え難く、また最も防ぎがたいものである。にもかかわらず、湿気は人間の内に「自然への対抗」を呼びさまさない。その理由の一つは、陸に住む人間にとって、湿潤が自然の恵みを意味するからである。洋上において堪え難いモンスーンは、実は太陽が海の水を陸に運ぶ車にほかならぬ。この水のゆえに夏の太陽の真下にある暑い国土は、旺盛なる植物によって覆われる。特に、暑熱と湿気とを条件とする種々の草木が、この時期に生い、育ち、成熟する。大地は至る所に植物的なる「生」を現し、従って動物的な生をも繁殖させるのである。

（中略）

理由の第二は、湿潤が自然の暴威をも意味することである。暑熱と結合せる湿潤は、しばしば大雨、暴風、洪水、干魃というごとき荒々しい力となって人間に襲いかかる。それは人間をして対抗を断念させるほどに巨大な力であり、従って人間をただ忍従的たらしめる。

（中略）

かくして我々は一般にモンスーン域の人間の構造を受容的忍従的として把握することができる。この構造を示すのが「湿

潤」である。

つぎは、砂漠に関する記述である。

我々は「乾燥」を desert の本質的規定として把握することができる。住むものなきこと、生氣なきこと、荒々しいこと、これらはすべて乾燥にもとづくものである。

（中略）

乾燥の生活は「乾き」である。すなわち水を求める生活である。外なる自然は死の脅威をもって人に迫るのみである。ただ待つものに水の恵み与えるということはない。人は自然の驚異と戦いつつ、砂漠の宝玉なる草地や泉を求めて歩かねばならぬ。

（中略）

砂漠的人間の功績は人類に人格神を与えたことにおいて絶頂に達する。

（中略）

犠牲食を体験し、神と人との血縁関係を信ずるというそのことにおいて、まさにこの全体性への帰属を実践するのである。そこで早くから道徳が神の命令として現れる。神は人間に対して「豊かなる土地と子孫」とを、あるいは「敵を滅ぼし疾病をのぞくこと」を、すなわち物質的生活の安全と繁栄を約束する。しかしその代わりに人間に対して衛生的及び道徳的な命令を守るべき義務を負わせるのである。

（中略）

乾燥とは人と世界との対抗的戦闘的關係、従って人間の全体性への個人の絶対的服従の關係である。

つぎは、牧野に関する記述である。

ヨーロッパの風土は湿潤と乾燥との総合として規定せられる。それはモンスーン地域のごとく暑熱がもたらす湿潤ではない。従って夏は乾燥期である。が、砂漠地域のごとく乾いてもいない。だから

冬は雨期である。この特性は、南と北との著しい相違にもかかわらず、ヨーロッパを通じての特性である。

(中略)

このように夏の乾燥と冬の湿潤とは、雑草を駆逐して全土を牧場たらしめる。

(中略)

夏の乾燥、冬の湿潤、すなわち暑熱が湿気と結びつかないということからして、我々は自然の従順を見いだした。

(中略)

自然が従順であることはかくして自然が合理的であることに連絡してくる。人は自然の中から容易に規則を見いだすことができる。そうしてこの規則に従って自然に臨むと、自然はますます従順になる。このことが人間をしてさらに自然の中に規則を探求せしめるのである。かく見ればヨーロッパの自然科学がまさしく牧場の風土の産物であることも容易に理解せられるであろう。

(中略)

農業労働の主要なものは牧畜と果樹作りとである。従って農業は気象の不安定に脅かされることなく規則正しい季節の循環雨期の到来によって、あまり豊穡ではないがまたあまり乏しくもない農産物を比較的確実に生産しうる。このことは風土が生活必需品の生産を牧場的に規定しているということを意味する。

(中略)

そこでは自然の恵みが豊かではないがゆえに、従って自然に忍従して恵みを待つを要しない。とともに自然に対抗して不断に戦闘的な態度をとらなくてはなら

ないほど自然が人を脅かしもしない。自然は一度人力の下にもたらされさえすれば、適度の看護によって、いつまでも従順に人間に服従している。この自然の従順がまず生産を牧場たらしめるのである。

なお梅棹忠夫<sup>14</sup>は、『風土』の自然環境と人間との関係を固定的な「関係的構造」「風土的限定」として捉えることに疑問を呈し、遷移(交流・交換)という概念を導入することの重要性を指摘し、これに基づき第1地域と第2地域に地域類型している。さらには、照葉樹林帯に着目して地域区分した『照葉樹林文化』<sup>15</sup>、海洋に着目した『文明の海洋史観』<sup>16</sup>などがある。

『風土』をまとめれば、モンスーン(湿潤)、砂漠(乾燥)、牧場(湿潤と乾燥との総合)という風土の違いが、農業生産基盤と「自己了解の仕方」、「人々の結合あるいは共同態としての社会」<sup>17</sup>を異なるものとする、ということである。

『風土』が気候と人間との関係を固定的に捉えていることや気候区分の大まかさなど批判されることは多いが、アジアとヨーロッパの気候の違いが生産基盤と人間の思考、信仰、コミュニティとの関係を知る上できわめて有効であると考ええる。

日本はモンスーンに位置し、湿潤な風土のために稲作に適し、水と耕地の管理と営農を中心として共同作業が不可欠で共同性を基盤にしたコミュニティが形成された。共同性を乱す者はコミュニティの存続を危うくするとして忌避され、個人主義が育ちにくい。一方、ヨーロッパは、湿潤と乾燥とが総合された風土であるために小麦と牧畜が生産基盤と

14 『文明の生態史観』1967年1月、中央公論社

15 上山春平、2009年5月(初出1969年10月)、中公新書

16 川勝平太、1999年9月(初出1997年11月)、中公叢書

17 前掲13

なり、いずれも耕地管理や営農においてあまり共同性を必要としない。いわば一人性が基本となる個人主義の揺籃となったのではないかと考えられる。

信仰と宗教についても、ヨーロッパが一神教なのに対し、日本はそうではないのは何故であろうか。

本居宣長は<sup>18</sup>、次のように「カミ」の概念規定を行っている。

凡て迦微とは、古御典等に見えたる天地の諸の神たちを始めて、其を祀れる社に坐御霊をも申し、又人はさらにも云わず、鳥獸木草のたぐひ海山など、其餘何にまれ、尋常ならずすぐれたる徳のありて、可畏き物を迦微とは云なり、【すぐれたるとは、尊きこと善きこと、功しきことなどの、優れたるのみを云に非ず、悪しきもの奇しきものなども、よにすぐれて可畏きをば、神と云なり】

日本における「カミ」は、「天地の諸の神たち」で「優れたるのみを云に非ず、悪しきもの奇しきものなども」「神と云なり」といい、一神ではないことを述べている。

また、寺沢薫<sup>19</sup>はカミとマツリについて次のように述べている。

神を『カミ』、祭を『マツリ』と表現することには理由がある。文化人類学者の岩田慶治氏によれば、神には人格や個性があり教養があるが、カミは森羅万象に宿る霊的存在(animus)である。それゆえ、神は断固とした政治的、文化的存在でもあるが、カミはじつに気ままに去来し、心を通じて語り合える日常的存在である。

(中略)

マツリには大きく二つの原像があると思う。一つは、日々の生活や生産に密着

したマツリで、この時代ではやはり農業生産の豊穰に関わるマツリだ。作況を占い、雨を乞い、害虫や風雨を避け、天地を鎮めるマツリなどだが、そのどれもが大地の生命力を増幅し、穀霊(穀物に宿る恵みの霊)を災いから遠ざけ、守るためのマツリである点で共通している。ここに、地霊(地に宿り大地の力を増大する霊)と穀霊という二つの精霊(カミ)観念が生じる。もう一つは、葬送に関わるマツリで、死者をいたわり、敬意、再生を願い、あるいは畏怖し、墓そのものをまつろうとする行為だ。そこでは、死者(祖先)の霊が共同体に安寧と永続をもたらし、災いから守ってくれるといった観念が生まれる。守護霊として祖霊(祖先の霊、カミ)への畏敬がこのマツリの大きな柱となっている。

(中略)

弥生人のマツリの根幹には、この、精霊(穀霊と地霊)と祖霊という2つのカミ観念への働きかけが混然として存在している。彼らにとってのマツリとは、自らのムラや共同体をあらゆる災いから遠ざけ、豊穣や繁栄への願いを表現するものなのだ。そして、このようなマツリの中なかで青銅器を使ったマツリこそが、共同体の一体化を促し、マツリを主宰する首長権力を直接に反映する最高位のマツリであった。

カミは、「森羅万象に宿る霊的存在(animus)」であることを紹介し、「弥生人のマツリの根幹には、この、精霊(穀霊と地霊)と祖霊という2つのカミ観念への働きかけが混然として存在」しているといい、寺沢も一神ではないことを述べている。

さて、都市起源からみた都市存立の要件を

18 『古事記傳三之巻』 p.9 本居宣長(『本居宣長全集第9巻』 p.127 1968年7月筑摩書房)

19 『王権誕生』 寺沢薫 講談社学術文庫 2012年2月(初刷2008年12月)

考察すると次の四つが浮上する。

第一に、定住もしくは集住する価値を共有(宗教・信仰)することである。ルイス・マンフォードが指摘するように、定住の起源は「巡礼の目的地となる儀式的集まりの場」であった。食料確保や外的から身を守るといった人間の生命の維持よりも、「永続的な宇宙的な像」を共有する場であった。近代以降の都市の性能として、衛生性・安全性・利便性・快適性の4つの確保が強調されているが、都市の起源を考えると、都市と呼ぶにはそれだけでは足りない。共有すべき価値が時代により変わっても、定住者がその都市に共に住む、集住するための共通の価値とそれを象徴するものを欠くことはできない。

第二は、女性原理による都市づくりである。ルイス・マンフォードによれば、食糧供給が旧石器時代より比較的安定した新石器時代の都市の原型となった集落は、「村は子供を世話し育てるための複合的な巣」であり、「家や村、そして結局は町自体が、大規模な女性」である。その後、男性優位の都市づくりにシフトしたとしても、我が国の著しい人口減少が予測されるなかで、この指摘は重要である。若年女性と子供養育の場としての場が、都市の原型であったことを思い起こすことが必要であろう。

第三は、モンスーン(湿潤)に適応するコミュニティの共同性の維持である。「自然の恵み」と「自然の暴威」をあわせてもたらすモンスーンは、稲作営農に適するが、その水と耕地の管理、田植え、稲刈りといった作付けと収穫において共同作業が不可欠である。稲作営農の共同性は、「ケ」(日常性)として

の生産の場でありかつ自然環境でもある里山・里海などから、水路・道路・集落施設などの維持管理に広がり、「ハレ」(非日常性)としてのマツリにまで貫徹される。これを、第一次産業を基盤とする社会の存続要件として退けるわけにはいかない。湿潤という風土がつくる「受容的忍従的」という「自己了解」を前提とすれば、「受容」も「忍従」も「一人」で受けるには「過剰」でありかつ「酷」である。「恵み」も「暴威」も共に分かち合うことで、喜びを大きくし、悲しみを軽減することが必要なのではないだろうか。既存のコミュニティが機能不全に陥っている現代都市において、どのような共同性を創り出すことができるのか、重要な課題の一つである。

第四は、これらを反映した都市の形態をどうつくるかである。日本の近世城下町に関する研究成果<sup>20</sup>、その原型となった平安京<sup>21</sup>、さらにその原型となった『長安の都市計画』<sup>22</sup>に関する研究がある。日本の都市が、都市の起源からみた都市存立の要件がどのように反映し、どのように変容してきたのかを分析することが、都市形態研究の重要な課題の一つである。

### 3 日本における「近代」都市計画の受容と変容

日本における都市の「近代化」の最初の例は、『明治の東京計画』<sup>23</sup>であろう。

藤森によれば、明治期の東京計画は当初3つの案があったとする。一つは「青年思想家」田口卯吉の「東京湾築港論」(明治12年)

20 例えば、『江戸と江戸城』内藤昌 1972年3月(初出1966年1月) 鹿島出版会、『城下町の地域構造』矢守一彦 1987年1月 名著出版

21 『日本都市史研究』西川幸治 1972年9月 日本放送出版協会

22 妹尾達彦 2001年10月 講談社選書メチエ

23 『明治の東京計画』藤森照信 1982年11月 岩波書店



に洪沢栄一が共鳴し市区改正審査会<sup>24</sup>案（明治18年）として決定した「商都」案、二つは市区改正審査会に提案された「全国の帝都にして政府の座所」として性格付け「パリのような帝都」を提案した山崎直胤（内務大書記官）の「帝都案」、三つは芳川顕正（内務省輔）が現実的な交通問題の改善を重視して市区改正審査会に提案した案である。芳川案は、「日本の都市計画の交通重視の伝統も芳川案に始まっている。芳川案の交通計画は、閉じた封建都市を前にしているかぎり納得のゆく主張にちがいないが、しかし、明治、大正、昭和初期を通して一まず都市を開き使命を果たしたあとにおいても、日本の計画は、都市を論じ像を描くことにはあまり意を注がず、無論、歴史や環境や美しさといった都市のふくらみには一切目もくれず、あたかも都市とは道路の別名でもあるかのように、ひたすら、道づくりにはげみ<sup>25</sup>と藤森は批判している。

これら3つの構想は、日比谷官庁街計画、横浜港拡大計画など既存事業との調整問題と絡んだ旧内務省内における権力争いがあり、「内務省は築港をあきらめ、テーマを市区改正にしぼり、明治二一年七月一七日、東京市区改正条例全一九条の草案を内閣に送り、「内閣了承のあと、草案は元老院に回され」たが、元老院では市区改正無用論者が「もっぱらパリ改造計画の物真似と決めつけ、身の程知らず、不要不急の事業」と難じた。

最終案はこれまでの意見を踏まえて、明治二十二年三月五日、市区改正委員会で決定される。藤森は、「委員会案は、芳川案や審査

会案にくらべ、標的のはっきりしない計画と評すほかない<sup>26</sup>と批判する。

明治期には、内務省地方局有志による『田園都市』が出版（1907（明治40）年）<sup>27</sup>され、日本の都市地域計画に大きな影響を与えた。1920年にはわが国最初の都市計画法が施行され、まず六大都市に適用され、順次、全国の地方都市に適用されることになる。都市計画法は、戦後の高度経済成長期における急激な人口増加と都市化に対応するために1963年に大幅な改正が行われて、その後も、住民参加を義務付けた地区計画制度（1980年）の制定と改正を重ね、現在に至っている。

太平洋戦争で甚大な被害を受け、戦災復興のための特別都市計画法が1946年9月に公布された。10月には115都市が戦災都市に指定され、区画整理事業を中心とする戦災復興特別都市計画が実施される。

その計画目標は、1945年閣議決定された「戦災地復興計画基本方針」<sup>28</sup>によれば、①過大都市の抑制と地方中小都市および農村の振興、②能率・保健・防災・美観などの見地から理想的な計画をたてる、③土地整理事業だけではできるだけ早急に完了、④事業は公共団体が行う、とある。

「能率・保健・防災・美観などの見地から理想的な計画」は区画整理事業による防災街区の設定と広幅員街路と公園、緑地地域の指定などによるハード整備が中心であった<sup>29</sup>。

ドイツにおける戦災都市復興では、まちなみを戦前のものに復旧するか、それとも近代的なまちなみにつくり変えるかといった議論

24 明治17年12月17日付で内務省に設置された

25 前掲23

26 前掲23

27 『日本近代都市計画の展開』石田頼房 2004年4月 自治体研究者

28 『近代日本建築学発達史』日本建築学会 1972年 丸善

29 『日本近代都市計画の展開』石田頼房 2004年4月 自治体研究社、『水戸戦災復興誌』1977年3月 茨城県

がなされ、住民投票で決められているが<sup>30</sup>、日本でそのような議論がなされた形跡は見当たらない。ただ単に、安全なまちという都市基盤の視点からしか検討されていない。

近世城下町を基盤とする明治以降の市街地整備と都市空間構造の推移を詳細に分析した労作がある。『城下町の近代都市づくり』<sup>31</sup>である。本書では、近世城下町が、中国や朝鮮の風水地理説を取り入れて空間が構成されていることを指摘し、その旧近世城下町基盤の類型と明治以降の近代化過程、都市化過程でどのように変容したかを詳細に分析している。また、江戸の空間構成も同様に、風水の「四神相応の地」の影響を受けているという分析<sup>32</sup>もある。

前掲した『城下町の近代都市づくり』は、都市空間構造の変容を主題としているためであろうが、分析対象とされた諸都市が目標とした都市像についての記述は少ない。これは、元々、都市計画の策定過程でそのような議論が少なかったことを表しているのであろう。もちろん、都市空間構造計画に目標とする都市像が表現されていると言えなくはないが、道路交通体系の改善を中心とした計画目標が優先されている。

さて、日本の多くの都市の基盤となった近世城下町が明治以降の近代化と1960年代以降の急激な都市化過程で、都市の起源となった「永続的な宇宙的な像」や<sup>33</sup>「子供を世話し育てるための集合的な巢」<sup>34</sup>としての基本的な機能、そして風土的特性<sup>35</sup>がどのように検討され、将来都市像が目標とされたのかは、

明確ではない。

このことに、日本の「近代」都市計画の受容と変容について、今後検討すべき根本的な課題があると考えられる。

#### 4 高度経済成長期以降の社会基盤の変化と時期区分

戦後我が国の社会状況の変化を、主に人口数（図1、2参照）と経済成長率（図3参照）および市民意識などから大まかに時期区分すると、3期に区分することができる。

##### (1) 成長型社会（1960～73年頃）

人口と経済が急成長する時代で、1960年の国民所得倍増計画<sup>36</sup>と、これに対応して「選択的規模拡大」を打ち出した1961年の農業基本法が公布され、経済と人口の急成長が進展する時期である。1964年には東京オリンピックが開催され、1966年には人口が1億人を超えた。人口増加に対応して都市の土地利用を計画的に行うために、1968年には都市計画法の全面改正が行われ、全国土で開発を推進する新全国総合開発計画が1969年に策定された。急激な開発に伴う大気汚染などの公害も頻発し、1968年に大気汚染防止法、騒音規制法が公布された。1973年には第4次中東戦争勃発を契機にした第1次「石油ショック」が起こり、これ以降、経済は低成長期に入り、ライフスタイルの見直しが進む。

この時期は、経済的豊かさが生活の豊かさとはほぼ同義に捉えられており、所得を増やす

30 例えば、ケルンでは戦前の伝統的なまちなみに復旧した

31 佐藤滋 1995年8月 鹿島出版会 拙稿「水戸～馬の背大地を貫く都市の軸」掲載

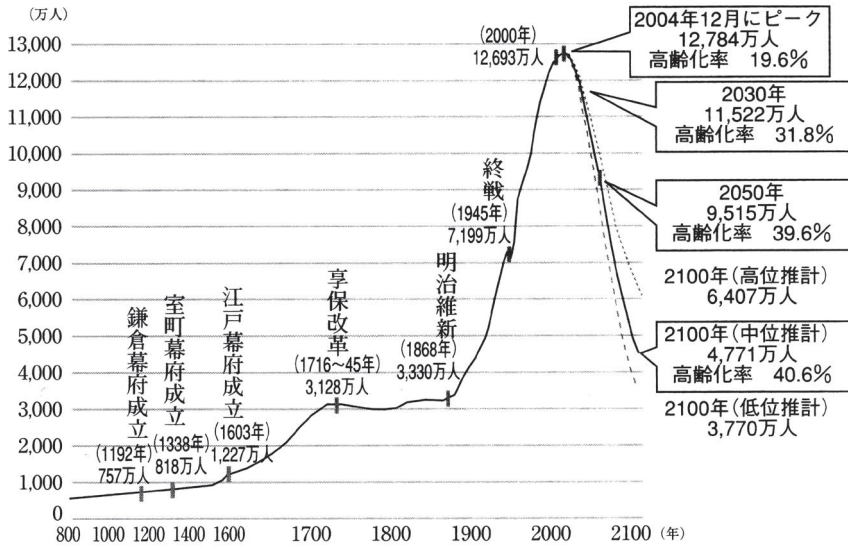
32 『江戸と江戸城』内藤昌 1972年3月（初出昭和41年1月）鹿島出版会

33 前掲3

34 前掲3

35 前掲13

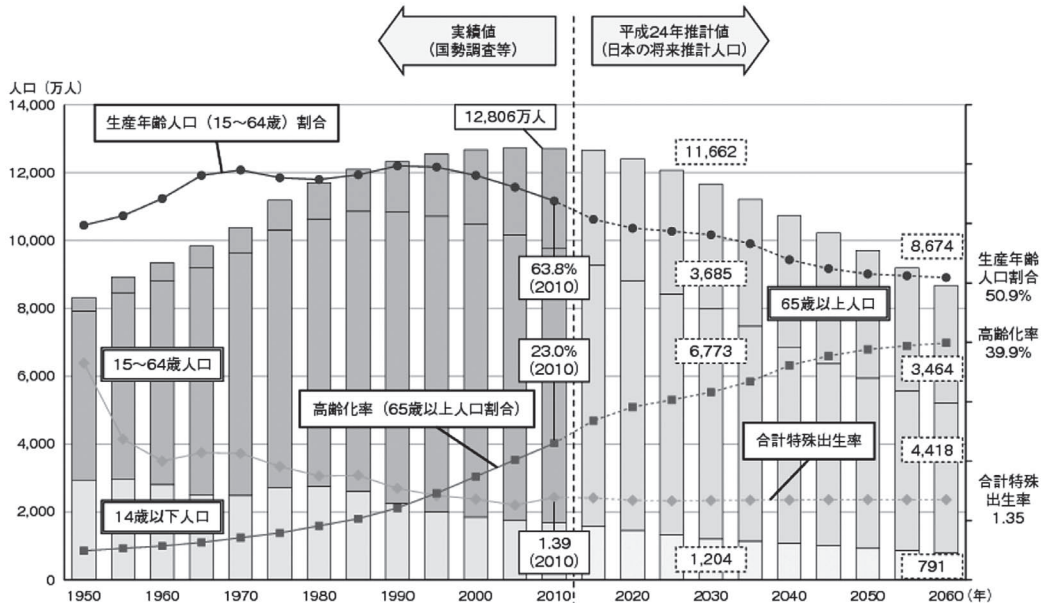
36 事業等の年月は、前掲29と『昭和・平成現代史年表』（神田文人・小林英夫編、小学館）を参照した



日本の総人口の長期的トレンド

(出所) 総務省「国勢調査報告」、同「人口推計年報」、同「平成12年及び17年国勢調査結果による補間補正人口」、国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口 (平成18年12月推計)」、国土庁「日本列島における人口分布の長期時系列分析」(1974年) をもとに、国土交通省国土計画局作成

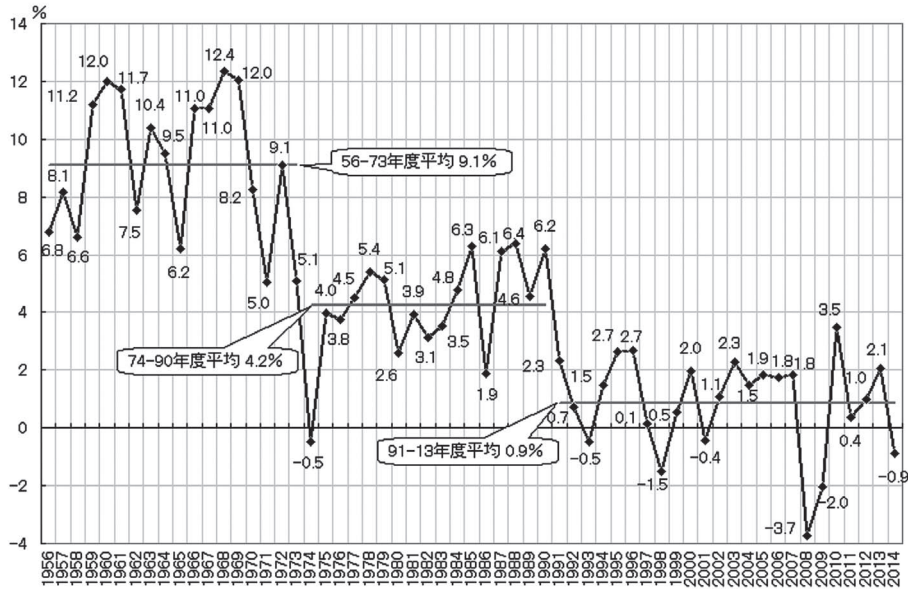
図1 日本の人口推移



(出典) 総務省「国勢調査」及び「人口推計」、国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口 (平成24年1月推計) : 出生中位・死亡中位推計」(各年10月1日現在人口)、厚生労働省「人口動態統計」

図2 戦後日本の人口推移

経済成長率の推移



(注) 年度ベース。93SNA連鎖方式推計。平均は各年度数値の単純平均。1980年度以前は「平成12年版国民経済計算年報」(63SNAベース)、1981～94年度は年報(平成21年度確報)による。それ以降は、2015年4～6月期2次速報値(2015年9月8日公表)

(資料)内閣府SNAサイト

図3 日本の経済成長率の推移

ために男性は会社で働くことに専念し、女性は家庭と地域社会を守るという男女性別役割分業(機械的分業)が進んだ。地域社会というよりも企業への所属意識が高い企業社会でもあった。人口増加に対応した開発と計画の時代でもあり、開発による自然環境の破壊や公害(1960年四日市ぜんそく、1965年新潟水俣病、1970年光化学スモッグ発生など)を引き起こし、自然環境や伝統的町並みの保全は軽視され、人口増加を目標とした都市計画が推進された。一方、1966年古都保存法公布、1975年文化財保護法改正による伝統的建造物群保存地区制度の新設など、歴史的町並み保全に対する機運の高まりや、1971年の環境庁設置に見られるように環境問題への関心も高まっていった時期でもある。

## (2) 成熟型社会(1973～2004年頃)

人口と経済が低成長の時期で、1974年

から1990年の平均経済成長率は4.2%で、1956年から1973年の平均9.1%の半分にも満たない。1998年には、老年人口が初めて子供(15歳未満)人口を上回り、少子高齢化社会が目前に迫っていることを想起させた。戦争の多い時期でもあった。1975年にベトナム戦争は終結するが、1991年ペルシャ湾岸戦争、2001年米国同時多発テロ、2003年イラク戦争が勃発した。その他、1977年日航機ハイジャック事件、1985年日航ジャンボ機墜落事故1986年ソ連チェルノブイリ原発事故、1999年東海村臨界事故と大規模な事故が多い。生命の安全性と過剰なナショナリズムの台頭等に懸念を抱かせる出来事であった。

この時期には、生活の豊かさ観<sup>37</sup>の多様化と高度化が進行したという特徴がある。いくら「モーレツ」<sup>38</sup>に働いても所得が伸びな

いことが予測され、「ビューティフル」<sup>39</sup>に生活を楽しもうという生活観が浸透し始める。1977年に策定された第3次全国総合計画(国土庁)は、流域圏をベースとした「定住圏構想」を発表し、これまでの経済成長に偏重した国土計画の見直しを構想した。会社が自分の居場所であることが相対化され、家族、地域社会、ボランティア等々への帰属が探し求められるようになった。所得向上のための男女性別役割分業はもはや意味を失い、男女共同参画社会をめざし、1985年男女雇用機会均等法が成立した。

人口増加に対応して都市を近代化する画一的な目標をかかげ、官と専門家主導により実行する計画策定プロセスに疑念が提起された。市民が中心になり、身近な地区の環境を点検し、良いものは保全し、修復すべきところは修復し、除去すべきものを除去して作り直すという、まちづくりの方法が1970年代半ば以降、全国に広がった。これらの動きに呼応して、1980年には、都市計画法、建築基準法改正が公布され、わが国最初の住民参加が義務付けられた計画策定方式の「地区計画制度」が制定された。

### (3) 「縮小型」社会 (2004年～)

2014年5月8日に日本創生会議<sup>40</sup>が発表した推計値は衝撃を持って受け止められた。2010年から30年後の間に、全国自治体の49.8%、896自治体が「消滅可能性」があるとするものであった。この間に、若年女性(20歳～39歳の女性)が5割以上減少する自治体は「消滅可能性」があるというものである。これに先立ち、国立社会保障・人口問題

研究所が「日本の将来推計人口」(平成24年1日推計)2011年から2060年、2061年から2110年(参考推計)を発表している。人口が急激に減少することが予測される時代、都市が消滅する時代である。2008年9月には、アメリカの投資銀行であるリーマン・ブラザーズが破綻したいわゆる「リーマン・ショック」が起こり、世界的金融危機が発生し、経済の今後の見通しが極めて不安定なものになった。

急激な人口減少傾向は、生産年齢人口の減少による経済成長の鈍化や高齢社会の医療・福祉・介護負担の増大と破綻など深刻な問題を提起している。一方で、広井良典<sup>41</sup>は「現在よりも人口が多少減ったほうが、過密の是正や空間的・時間的・精神的なゆとり、環境・資源問題等々、様々な面でプラスであると考えるほうが理にかなっている」という。

このような主張は、人口減少を人口過密の解消にすり替え、人間の動物としての種の存続意欲の減退と、あいかわらずの経済的豊かさ(富の配分を変え、エコソーシャルな資本主義を提案しているとしても)を偏執的に追求する非動物(人間)的な風潮を是とする社会システムが機能不全に陥っていることに無自覚であることを露呈しているにすぎない。人口減少は、決して「希望」ではなく、人間の動物性の喪失と社会システムの機能不全を象徴する現象であることを再認識する必要がある。

都市が消滅することが予測される中で「計画」は機能しない。計画は、人口が増加し開発ニーズが大きかった時に、それらが都市を無秩序にしないように規制し計画的にコント

37 『豊かさとは何か』暉峻淑子 1990年12月(初出1989年9月) 岩波新書

38 「モーレッツからビューティフルに 忘れていた人に会いましょう。日本のどこかで」1970年富士ゼロックス株式会社の広告キャンペーン

39 前掲38

40 日本生産性本部が2011年5月に発足した民間の発議体である。(ウイキペディアによる)

41 『人口減少社会という希望』2014年1月(初出2013年4月) 朝日新聞出版

ロールするものであった。もはや、少なくとも地方都市では無秩序になるような人口増加も開発ニーズも存在しない。重要なことは、過去の都市の賑わいや活気ある経済活動を懐かしんだり、再生しようとするのではなく、まだ今、残っているモノや場所、コト、意欲あるヒトを再発見し、磨きをかけて、支援し、それらをつなぎ、持続可能に経営することである。まちづくりにおける市民自治の重要性が益々問われる時期になった。

このような戦後日本の社会状況の変化は、都市の起源と人間的、風土的特性からどのように評価できるのだろうか。

まず都市の主体が基本的に男性優位であったこと。そのため、子供を養育するという基本的な都市の機能が軽視されてきたこと、生活の豊かさを経済に求めるあまり集住する精神がないがしろにされコミュニティが崩壊したこと、風土的特性への関心が向かず自然環境の破壊が進み、モンスーン（湿潤）という風土的特性を生かした都市づくりと地域振興が行われなかったこと、そのため自然と人間との関係構造としての「自己認識」が曖昧になったことなどが指摘できる。

## 5 大洗町ガルパン現象にみるまちの新しい魅力

ガルパンとは、茨城県大洗町を舞台とした人気のあるアニメ作品の一つである。

『『ガールズ & パンツァー』（ガールズアンドパンツァー、GIRLS und PANZER）を略したもので、2012年10月から同年12月までと2013年3月に放送されたテレビアニメ。2013年10月から12月ま

で地上波（TOKYO MX）で、2014年1月より3月までBS11で全12話が再放送された（両局ともに映像ソフト版を放送）。さらに、2015年にテレビ東京、BS11で再放送<sup>42</sup>されており、「戦車を使った武道である戦車道が華道や茶道と並び大和撫子の嗜みとされている世界を描いた物語で、兵器である戦車を少女達が運用するという、ミリタリーと萌え要素を併せ持つ作品。サンクスのほか、茨城県東茨城郡大洗町の店舗や宿泊施設、交通機関、役場や商工会などが協力・応援しており、街並、各種施設、交通機関がほぼ忠実に再現され、一部は実名で登場する。<sup>43</sup>

ガルパンファンが大洗町に多数押し寄せることで、①商店街の賑わいが回復<sup>44</sup>し売り上げが伸びた（経済効果）、②商店経営者とアニメファンが共同してまちづくりを実践した（まちづくり効果）、③町民と観光客（アニメファン）との交流が促進された（交流促進効果）などがあったといわれている。

著者は、これらの効果以外に、ガルパン人気現象には都市の新しい魅力を考える重要なヒントを含んでいると考える。

ラジオ番組（NHK「すっぴん」）でアニメ評論家から、中学生の間で「さすおに」<sup>45</sup>という言葉がはやっているとの情報提供があり、「兄と妹」との役割分担が明確であることが人気の一つであると指摘された。

いわゆる団塊の世代に人気があったアニメやラジオ・テレビドラマをあげると、ラジオドラマの「赤胴鈴之助」（1957～58年映画9本放映）や国民的人気を博した「鉄腕アトム」（1952年4月号～1987年連載、少年、光文社）、「明日のジョー」（1968年1月号～1973年5

42 ウィキペディアより <https://ja.wikipedia.org/wiki/ガールズ%26amp;パンツァー>

43 前掲23 HPは <http://girls-und-panzer.jp>

44 ウィキペディアによると、野村総合研究所の試算で経済効果は2013年度の1年間で観光客数が述べ15万9000人、金額にして7億2100万円に上ると見られているという。

月号連載、週刊少年マガジン、講談社)、テレビドラマ「水戸黄門」(1969年8月～2011年12月)などがある。これらは、いずれも主人公が明確で、しかも社会の悪に果敢に立ち向かうヒーローという共通した性格を持っている。いわゆる団塊の世代を中心とした戦後世代は、アニメやラジオ・テレビドラマのヒーローに憧れ、自己同一化することを求めていると思われる。その背景には、人口と経済が高度に成長する社会基盤が若者にその将来に「希望と夢」を与え、社会的弱者を救うヒーローへの自己同一化を求めたのではないだろうか。

ところが、ガルパンにはこのようなヒーローは存在しない。戦車による戦闘ゲームに勝つことを共通の目標として、その目標を達成するために各自がそれぞれの役割を分担するメンバーがいるだけである。ガルパンには、一人だけのヒーローはいない。にもかかわらず、人気が高いのは何故だろうか。

1983年の第1次オイルショック以降、日本経済は低成長を余儀なくされ、人口構成と数も少子高齢化と減少が予測され、「成長型社会」から「成熟型社会」へと移行する。そこでは、経済的豊かさが生活の豊かさに直結するという価値観から、趣味の重視など価値の多様化と高度化が進行し、個人の生きがいや存在意義を高めることが大きな関心事となった。また、企業や社会の資源の効率的利用を名目に、労働のIT化と合わせて労働に対する管理強化が進み、能力評価の厳しさが増し、ひいて

は富裕と貧困が並存する格差社会を生み出すことにつながった。若者が将来に「希望や夢」を持ちにくく、自己の存在意義も確認しにくい「生きづらい」社会が到来したと言える。

ガルパン人気の理由は、この社会状況の変化にあると考えられる。

このアニメを通じて、戦闘ゲームに勝つという明確な生きる目標を持つことができ、その目標実現のために自分ができていることを分担することで自己の存在意義を確認することができ、他のメンバーとのコミュニケーションにより居場所を発見する。すなわち自分の存在が認められるコミュニティに所属することができる。

アニメの中だけの「バーチャル」なコミュニティではなく、イベントを通じた「リアル」なコミュニティを形成した。2012年11月17日大洗あんこう祭り(第16回)特設ステージにおいて声優(キャラクター西住みほ・声優渕上舞他4名が参加)によるトークショーが行われ、例年の来場者が3万5000人のところ6万人が参加した<sup>46</sup>。また、アニメのシーンになった大洗の海岸を2013年7月7日(日)の大洗町定例掃除にガルパンファンが最初に自主的に参加し、掃除をしたという<sup>47</sup>。実際のまちづくりを町外者が始めたことに意義であろう。その後、あんこうチームの特別住民票を2013年4月1日から6月28日まで大洗町役場住民課窓口にて販売したところ、6月7日までに発行数が1万件を超えた<sup>48</sup>、と云

45 <http://dic.nicovideo.jp/a/さすおに> : 『魔法科高校の劣等生』アニメプロジェクトの公式 twitter アカウントのフォロワー 40,800 (しば) 人突破記念と称して、アニメ公式サイトで、メッセージ付き画像が配布開始した。作中で兄・司波達也をひたすらにほめちぎる司波深雪を象徴する台詞として、人々に強い印象を与え、さすおにという言葉はアニメの実況時に書き込まれる定番になった。本来は上記の通り「さすがはお兄様です」の略称であるのだが、「流星ですお兄様」という架空のセリフも大いに広まっており、達也(あるいは兄貴キャラ)を褒め称えるコメントとして定着しつつある。

46 ウィキペディアによると、ガールズ & パンツァー Twitter 公式アカウント、(2012年11月18日)に掲載とのこと

47 大洗町職員による情報提供

う。大洗駅には、特別住民票を持つガルパンファンの名札を掲示するスペース（99名分、2013年3月時点で空きがない）が設置されており、町への在・不在がわかるようになっている。出身地と居住地は異なるにもかかわらず、大洗町は彼らにとっての第2の故郷になっているのではないだろうか。

都市の魅力が、衛生性・安全性・利便性・快適性を兼ね備えていることが重要な要件であることに変わりはないが、もはやそれだけでは、特に若者は魅力を感じるができないのではないだろうか。

自分の夢や希望、生きる目標が持てること、その目標を実現するために他者と協力できること、そして自分の存在を認めてくれる居場所すなわち所属できるコミュニティがあること、が重要になっているのではないだろうか。

このことは、ルイス・マンフォードが指摘した都市の起源の側面、「単なる肉体的存続よりもっと価値あり意味ある生活に関係がある一つまり、性および生殖という最初の神秘と、死および死後の世界という最後の神秘とをさと、過去を意識し未来を思うということに関係がある」<sup>49</sup>、と大いに関わっている。「過去を意識し未来を想う」ことができない、自分の夢や希望が持ちにくい都市コミュニティに人間は魅力を感じられないのは当然である。

居住する場の魅力を考える上で、NHK朝ドラ「希」放送最終回の希の言葉が印象的である。「故郷って、場所じゃのうて、ここで会われた大切な人たちなのかも知れんって、

思いました<sup>50</sup>」。

## 6 庭園自給圏都市の再構築に向けて

急激な人口減少と経済の不透明性に伴う社会システムと都市の機能、空間利用の変更を余儀なくされている。「縮小型社会」において、我が国の風土を生かし、都市の起源からみた役割と機能さらには人間の基本的特性をも踏まえた将来都市像をいかに構築するかが問われているのではないだろうか。

日本の都市や地域、自然風景の美しさは、明治時代にアメリカ合州国出身で福井と東京で教鞭をとったW.Eグリフィス<sup>51</sup>や英国人女性のイザベラ・バード<sup>52</sup>、『日本風景論』の志賀重昂<sup>53</sup>などにより賞賛されている。

「庭園都市」は英訳すれば「garden city」となるが、これはイギリスの産業革命後にE・ハワードにより構築された近代の理想都市の一つ「GADEN CITIES OF TO-MORROW」<sup>54</sup>に他ならない。「都市と農村の結婚」をコンセプトに、人口3万2千人で、低密度で緑地が多く、市街地をグリーンベルトで囲い、中央に中心都市を配置し、6つのgarden cityと合わせて25万人の都市圏を構成する。土地の私有を認めず、職住一体で自治とコミュニティの連帯を重視している。日本に紹介される<sup>55</sup>と、電鉄会社の郊外住宅地開発や農村コミュニティの改善に大きな影響を与えた。

E・ハワードのgarden cityの起源を川勝平太<sup>56</sup>は、指摘する。

48 ウィキペディアによる

49 前掲3

50 「希」NHK 2015.9.26 放送 原作・脚本篠崎絵里子

51 『明治日本体験記』1984年 平凡社

52 『日本奥地紀行』1973年 平凡社

53 『新装版日本風景論』2014年2月 原本は明治27年に出版

54 日本語訳『明日の田園都市』1998年2月（初出1968年7月）鹿島出版会 原本は1902年に出版



それはほぼ疑いなく幕末に日本を訪れた外国人の日本都市のイメージである。家に縁側があって庭に面し、長屋の狭い路地にも朝顔や植木鉢を置いて緑を大切にした百万都市江戸の生活風景を外国人は garden city と形容した。庭園都市という形容は暮らしのなかに緑（自然）が育てられて、生活と庭が一体となっているさまをとらえたものである。それが外国に伝わり、ハワードによって都市づくりのモデルとなり、一世を風靡した。庭園（田園）都市の究極の原型をたどっていくと日本に行き着くのである。

さらに、「江戸には数百の大名庭園があり、町人のあいだにも園芸熱はさかんであった。また、全国の城下町も小江戸としてガーデンタウンであったことに変わりない」、「地球の表面積の7割は海で覆われ、水が循環する「水の惑星」であり、(中略)大陸も海に浮かぶ大きな島でしかない。地球の姿は多島海として特徴づけられ」、「多様な自然を生かした島づくりをすれば、その姿は、地球的に見れば、グローバル・ガーデンアイランズ」であるという。志賀<sup>57</sup>も、日本は「気候、海流の多変多様」、「水蒸気の多量」、「火山岩の多々」なることが特徴であることを指摘している。また、鈴木博之<sup>58</sup>は、「庭園都市とも評される江戸は、水平に広がる庭園のモザイクによってできあがっていた」とし、それが明治維新後の「武家地の崩壊は、江戸の庭園の崩壊であった」とする。野中勝利<sup>59</sup>は、城下町都市圏を庭園都市圏として再構成する提案を行い、その事例として「最上エコポリス」構想

を紹介している。

日本の地方の近世城下町にも川勝が指摘するように多くの大名屋敷と神社仏閣、天守閣がある城郭があり、さながら庭園都市の様相を帯びていたことが想像できる。さらに、これらの公共的緑地の他にも、武家屋敷の敷地は明治期の土地台帳を見ると、その面積のおよそ半分は庭もしくは畑になっている。いわば、武家屋敷においては、宅地利用と農作物の自家栽培畑地という都市的土地利用と農業・緑地的土地利用で構成されていたことがわかる。日本の近世城下町は、都市的土地利用に特化した空間ではなく、都市的土地利用と農業的土地利用が混合した「農住混合都市」であったと考えられる。それが、明治以降の土地の私有化と1960年代の急激な都市化に伴って、敷地内の畑地が宅地に転換され、民地における農業・緑地的土地利用が衰退していった。

このように、日本の近世以降に成立した諸都市は、もともと庭園都市であった。近世城下町には、防御機能を併せ持つ堀が少なくとも三重（内堀、中堀、外堀）に張り巡らされ、城下に隣接する河川から導水され、さながら「水の都」の様相を呈していたと考えられる。それが明治以降の都市の近代化と1960年代の急激な都市化過程で、多くの堀が埋め立てられて道路利用に転換されることになり、「水都」としての「庭園都市」の都市風景を喪失していく。

「農村の都市化」ではなく「都市の農村化」をはかる必要があるという主張がある。

進士五十八<sup>60</sup>は、「都市と農村はともにハー

55 『田園都市』内務省地方局有志 1907（明治40）年

56 『文明の海洋史観』1999年9月（初出1997年11月）中央公論社

57 前掲53

58 『シリーズ日本の近代 都市へ』2012年10月 中央公論新社

59 「庭園都市圏としての城下町都市圏の地域マネジメント」野中勝利 季刊まちづくり 29 2010年12月 学芸出版社

フ・ソサイエティである。つまり、都市も農村も一人前ではなく、半人前でしかない。本当のソサイエティとは都市と農村が渾然一体として共存した、いわば『共生生態系』であるとし、農業の多面的役割に着目する。都市内農地を緑地としても位置づけて、農地を維持することで「21世紀は本格的に都市の農村化が志向され、それによって野生性の復活や人間性の回復が目指される」ことになると主張する。また、川勝平太<sup>61</sup>は、「コンクリートで塗り固めた都市を究極のゴールとした『アーバン化』から、水と緑の桃源郷を究極のゴールとする」「都市のルーラル化」を主張する。

いずれの主張も、都市内緑地の拡大により「都市の農村化」をはかるという主張である。

また柳田國男<sup>62</sup>は、「日本の町は本来一郷一荘園の便宜の為に作った所のもの」で「消費町、交易町、生産町」の3種類に分類している。交易町の説明で、「それよりも憂うべきことは、今日此等の町々に充満して居る思想として、遠くへ売り遠くから買ふという仲買を主とし、地方的消費を眼中に置かぬ点」であると指摘する。都市と周辺農村との経済的な有機的圏域構成の弱体化傾向に対する懸念である。現在の地産地消につながる問題意識であり、都市と農村は、経済圏としても生活圏としても有機的な関係を持った一体的な圏域であったことがわかる。

1977年11月には定住圏構想を掲げた「第3次全国総合開発計画」(国土庁)が閣議決定され、流域圏単位を生活と生産の一定の自立性を高めることが目標とされた。都市と農

村を一体として圏域を振興することは現代においても重要な地域課題の一つであることに変わりはない。

また、地域でのアウトルキーを高めるべきだとする主張もある。内橋克人<sup>63</sup>は、「地球環境との共生」を目指し、「企業優位のマネー資本主義から、地球に生きる人間の生存条件を優位に考える、生活基盤を強固にしてゆく、そういう社会に向けて」「食糧(フーズ)、エネルギー、そしてケア(介護を含む人間関係)のそれぞれの頭文字FとEとCを統合した『FEC自給』」を提案している。

経済のグローバル化は、国境を越えて食料、工業製品、情報などを提供し、それぞれの地域住民の生活を豊かにする一方で、西洋的な近代化を達成していない地域においては、これまで維持、継承されてきたライフスタイルや伝統的な地域文化、コミュニティなどを破壊する恐れがある。

ヘレナ・ノーバーク・ホッジがラダック<sup>64</sup>の調査研究から「共同体や大地との親密な関係が、物質的な富や技術的な洗練などを越えて、人間の生活をとても豊にすることができるのだということを知ようになった。別の道も可能なのだ」ということを学んだように、行き過ぎたグローバリゼーションは富裕地域と貧困地域との格差を拡大する恐れがあるのみならず、風土を反映した地域ごとに個性ある「人間存在の仕方」とコミュニティにおける「共同性」すら否定することにつながりかねない。

小説家の中上健次は<sup>65</sup>、経済のグローバル化が進展する状況を踏まえて、「国家が解体

60 『「農」の時代』2004年6月(初出2003年2月) 学芸出版社

61 『ガーデニングでまちづくり』2003年5月 中央公論社

62 『町の経済的使命』『定本柳田國男集第16巻』(新装版)昭和50年8月(初出昭和44年9月) 筑摩書房

63 『もうひとつの日本は可能だ』2009年7月(初出2006年12月) 文春文庫

64 『ラダック 懐かしい未来』ヘレナ・ノーバーク・ホッジ 2003年7月 山と溪谷社

していくイメージ」について、「日本は海ですよ。日本は海で動いている。本来、海というのはゾーンだから、どこが線かわからないわけでしょ。線は引いても消えるんだから。日本人のボーダー意識というか国境意識というのは、やはりゾーンの意識だと思うんだよね」と述べ、近代的な国家・国境を相対化する必要性を指摘している。これは、国家にだけ当てはまるのではなく、一つの国家内の地域の捉え方にも通じるものである。その「ゾーン」をどのように想定するかが問われているのであろう。

それは、モンスーン地域の特徴である水系を単位として生産と生活の有機的な結びつきによる地域社会の「共同性」が形成され、水景を特徴とする庭園都市のネットワークが維持され、一定のアウトルキーを保持している、河川流域を基盤とした「庭園自給圏」であると考ええる。

急劇な人口減少が予測され「消滅」する「自治体」すら現出するという日本社会においては、「共同性」を人間の存続を目標にした「共育」にターゲットを絞るべきであると考ええる。若年女性が子供を産み育てることに躊躇する理由は、経済的理由、子育てサポートの貧弱さ、自己実現との関係など様々指摘されているが、子育てが「孤独」であるという理由をあげる女性が多い。「子育て」が「孤育て」になっている。核家族では、祖母や頼れる身内は近くにおらず、夫は仕事で帰りが遅く、コミュニティはとっくに崩壊している。さらに公共の子育て支援は希望するサービスを受けにくい場合があり敬遠してしまう。そんな、「孤育て」シーンが目に見え浮かぶ。

「自助・共助・公助」のいずれもが十分に機能しない状況がある。まして、既存のコミュニティへの参加頻度が1割強<sup>65</sup>という（町内

会。自治会への参加頻度：参加していない／51.5%、年に数回程度／35.8%、月に1日程度／12.7%）状況では、これに頼ることはできない。かといって、参加頻度を増やし、既存のコミュニティでの子育て支援を充実させることは可能であろうか。コミュニティによっては、参加率がほぼ100%の地区や活発に活動している地区がないわけではないが、ほとんど例外に近い。「共助」という概念が、第1次産業が経済基盤であった時代における集团的、強制的な意味合いを含み、現代社会における個人の自由度が増し、サービス化、IT化、グローバル化を経済基盤とする社会には馴染まない。

一方で、退職者や中高年齢の女性が趣味講座や公民館活動、ボランティア活動を通じて人間関係が深まり、いわば擬似的な「コミュニティ」を形成している状況が見られる。ここでは、「共助」ではなく、共に楽しむ「共楽」を媒介としてつながっている。自分ができる範囲でお互いに補助しあい、緩やかで地理的に限定されないオープンでフラットな「擬似的な「コミュニティづくり」が進行している。「孤育」から「共育」への社会システムの転換が強く求められている。

ここに、河川流域を基盤とした水・食料・エネルギー・ケアが自給的で、優れた水景を有し、共に楽しむことを媒介にした「共同性」が再構築された「庭園自給圏都市」構想を提案する。

この「庭園自給圏都市」は、生産性・機能性・効率性・成果主義・戦闘性を重視する「男性原理」ではなく、スローな生活・デザイン性・プロセス・協調性を重視する「女性原理」に基づいて構築されなければならない。鎌倉時代以降続く日本の「男性優位社会」を、「男女共同参画社会」ではなく、「女性優位社会」

65 『アメリカと合衆国の間』石川好、中上健次 1987年7月 時事通信社

66 『国民生活選好度調査』2007年 内閣府

にもうそろそろ転換する必要がある。ルイス・マンフォードが指摘した「都市は女性が創造」した起源を思い出す必要がある。

西洋中世都市において、宗教的権力（教会）と世俗的権力（ギルド）、政治的権力（封建領主）三者による自治都市が成立していた<sup>67</sup>ことは今更、指摘するまでもないことであるが、提案した優れた水景で構成される「水景庭園自給圏都市」の「都市自治」の「主体」をどう想定するかは大きな課題の一つである。とりあえず、「都市自治」の「主体」というよりは、都市に関わる多様な価値と論理の整合性をどうはかるか、すなわち「地域づくりの文脈」という観点から考えたい。

一つは、環境の文脈である。地球環境問題に加えて女性の合同特殊出生率の極端な低下を想定すると、日本列島に居住する人間の絶滅すら懸念される。自然環境の保全に努めるのは当然であるが、都市地域環境を特に、若年女性と子供の安全性と快適性の確保にシフトした対策が不可欠である。二つ目は、人間の文脈である。人口と経済、都市などが縮小

する社会は、限られた富の配分をめぐる富裕層と貧困層が並存するもしくは二極分化する格差社会かつ過度な管理社会でもあり、若年女性に限らず、特に若者が「生きづらい」社会である。時代の社会基盤の変化に対応し社会的弱者に優しい、希望の持てる生きがいのある経済・社会システムに転換する必要がある。三つ目は、経済の文脈である。内橋克人<sup>68</sup>が主張するように、「企業優位のマネー資本主義から、地球に生きる人間の生存条件を優位に考える、生活基盤を強固」にする経済システムへの転換が欠かせない。

このような考え方は、E.F.シューマッハーによって既に指摘されていることでもある。<sup>69</sup>

このように、優れた水景で構成される「庭園自給圏都市」の地域づくりの文脈は、現今の「経済の論理」を偏重した文脈から、「環境の論理」と「人間の論理」、「経済の論理」が有機的に結合した、地域経営システムへと再構築する必要がある。

（さいとう・よしのり 本学部教授）

67 『都市の類型学』 マックス・ウェーバー 世良晃志郎訳 1991年5月（初出1965年2月） 創文社

68 前掲63

69 『スモール イズ ビューティフル—人間中心の経済学』 小島慶三他訳 2000年12月（初出1973年） 講談社学術文庫